

# 御岳山および山麓における地震活動の推移

## Change in seismic activity in and around the Ontake volcano

# 山崎 文人[1]; 大井田 徹[2]

# Fumihito Yamazaki[1]; Tooru Ooida[2]

[1] 名大・環境・地震火山センター; [2] 東濃地震科学研究所

[1] Res. Ctr. Seismol. & Volcanol., Nagoya Univ.; [2] TRIES

<http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/>

御岳山とその近傍の地震活動は、

- (1) 山体直下浅部の小規模な地震活動
- (2) 直下の活動を除いた山体周囲 6 ~ 7 km の範囲での顕著な地震低活動域
- (3) 長期にわたる山麓での群発地震活動
- (4) 群発地震活動域内で発生した 1984 年長野県西部地震(M6.8)とその余震活動に区分される。

これらの地震活動の特徴を以下に示す。

(1)は火山活動との関連性が高いと推測されるが、山体での観測体制が不十分なため、活動の詳細は定かでない。(2)も同様である。

(3)(4)の活動については火山活動との直接の関連は一切認められていない。特に(3)については、1976年に確認されて以来、御岳山の噴火活動、震源域内での1984年長野県西部地震の発生など、いくつかのイベントを生じながら今日も継続している特異的な群発地震活動である。有史以来はじめての1978年10月の御岳山の噴火活動の際には、地震活動度の変化は一切認められなかった。活動は南北2つの領域で異なる様式で発生する傾向があり、力学的に何らかの不連続構造が存在している。この特徴はその境界部に生じた(4)の活動の際に顕著に認められ、北部の群発活動は著しく励起されたが、南部の地震活動は相対的に独立した活動度を示した。群発地震活動の全体の分布のパターンは時期により異なる様相を示し、(2)を避けるかたちでの東部~北東部、さらには北部への活動域の拡大が著しい。

(4)は群発活動域内で混在するかたちで発生しており、特異的である。直接の余震活動と見られる活動は今日も継続している。

火山活動とこれらの地震活動とは地学的スケールでは一連の活動と考えられ、おそらくそれらを規定していると推測される地殻内の流体の挙動とともに、その解明は長期的課題として残されている。